

保名（深山桜及兼樹振）

へ恋よ恋われ中空になすな恋 へ恋風が来ては袂にかいもつ
れ 思う中をば吹きわくる 花に嵐の狂いてし へ心そゞろにい
ずくとも 道ゆく人に言問えど 岩せく水とわが胸と 砕けて
落つる涙には かたしく袖の片思い

へ姿もいつか乱れ髪 誰が取り上げていう事も 菜種の畑に狂
う蝶 翼交わしてうらやまし へ野辺のかげろう春草を 素袍
袴にふみしだき 狂い／＼て来たりける

へなんじゃ 恋人がそこにいた、どれ／＼／＼

エ、またうそいうか わつけないこと 云うはよい

へアしあれを今宮の へ来山翁が筆ずさみ 土人形のいろ娘

へ高嶺の花や折る事も 泣いた顔せず腹立てず へりんきもせ
ねばおとなしう アラうつゝなの妹背中 へ主は忘れてござんし
よう へしかも去年の桜時 植えて初日の初会から 逢うての
後は一日も 便りきかねば気も濟まず うつら／＼と夜を明
かし へひるねぬ程に思いつめ たまに逢う夜の嬉しさに へ酒
ごとやめて語る夜は いつよりもつい明け易く へいのうへ去な
さぬ へ口舌さえ へ月夜鳥にだまされて へいつそ流して居続
けは 日の出る迄もそれなりに

へ寝ようとすれど寝いらねば 寝ぬを恨みの旅の空 へよさ
の泊りはどこが泊りぞ 草を敷寝のひじ枕／＼ 独り明かすぞ
悲しけれ／＼ へはごしの／＼幕の内 昔恋しき面影や移り
香や その面影に露ばかり へ似た人あらば教えてと 振りの
小袖を身に添えて 狂い乱れて伏し沈む。